

小説同人誌評 26

『あべの文学』 万歳！

細見和之

コロナウィルス禍で、文字どおりでこ舞いの状態である。「対面合評が大阪文学学校の命」と理事会では語り合ったが、さすがにそう言っているだけでは済まず、文学学校のクラスでもオンライン合評を開始するところが出てきた。早く合評をやりたいという生徒さんたちの気持ちもよく分かるのだ。

私自身は、これはあまりの過剰反応ではないかと職場で口にして、しばしば響きを買ってきた。こういう「危機」を軽んじると、昔は「非国民」と指弾されたが、いまは「人類の敵」と断罪されかねない。それでも、今回の騒動の中心にあるのは、「中国武漢発の新型コロナウイルス」という、実体を離れたイメージではないかと、いまでも私は考えている。ところで、前回、大阪文学学校の事務局から私のもとに届けられた同人雑誌の数はそれまでいちばん多かったと記したが、対照的に、今回はいちばん少なかった印象である。

とはいえ、月刊で発行されている『VIRKING』は四冊がふくまれていた。時間的な一回分としては標準的である。つまり、前回が多かったから今回が少ないというわけでもなさそうだ。コロナウィルス禍で、雑誌の発行自体が減少している可能性が考えられる。同人の合評をへて掲載という方針を採っている雑誌の場合、その肝心の合評が成立していないのかもしれない。

さて、そんななか、『あべの文学』第30号が、驚くほどの充実ぶりを示している。同人十四人の小説、三人のエッセイにくわえて、小説作法に関わる奥野忠昭の貴重な評論まで掲載されていて、三六〇ページの大冊に仕上がっている。しかも、小説のほとんどがびっくりするぐらいよく書けている。この雑誌にはこんなに達者な書き手がそろっていたのだと、あらためて見直した。三十号の記念にむけてみんな気合いの入れ方が違ったのか、それまでの私の目が節穴だったのか。

同誌の巻頭に掲載の、滝尾鋭治「アイリー」は、ほのぼのとした愛猫小説。

ある日、主人公の山口秋男のもとに、次女の礼子が猫を連れて帰ってくる。会社の寮で飼っていたのだが、不快なことがあって会社を辞めたため、ふたたび自宅で暮らしながら飼いたいという。娘がまだ小さいころ妻は亡くなっているため、父と娘、猫の「アイリー」

の暮らしがはじまるが、それも束の間、礼子は、再就職して友だちと同居するので、猫の面倒をひとりみてほしい、と秋男に身勝手にも頼む。秋男とアイリーの暮らしがはじまる。秋男はアイリーに次第に愛着を覚えてゆき、その猫に生前の妻の面影さえ感じ、生きる支えとすら感じるようになってゆく…。

最後にアイリーには、自分の命と引き換えに秋男を重い病氣から救ったという位置づけさえあたえられる。秋男を視点人物としながらも、タイトルどおり、ほんとうの主人公はアイリーなのだ。

同誌掲載の、高塚基「鉄塔の下」は、中学校二年の浩の視点で、朝鮮人の生徒・金村との出会いと別れを描く。

浩のクラスには健一という柄の大きな番長気取りの生徒がいる。浩は小学校からの同級生、山下をつうじて、その取り巻きのひとりのような位置にある。ある日、健一が高圧鉄塔のふもとを指して「あそこなア、チョーセンが住んどんねんど」と言う。浩のクラスにはそこから通っている金村という生徒がいて、浩は、金村が屋根瓦の下の雀の巣からヒナを集めているのを目にする。浩は金村の自宅を訪れて、雀のヒナを見せてもらったりする。父親が肝硬変で亡くなっていった金村の自宅で、母親が重い病で臥せている。

一方、健一には金村に対する敵愾心が強く、

とうとう、ヒナを入れた箱を抱えた金村を、健一は山下と浩を引き連れて、脅そうと詰め寄る。浩は金村のヒナを守ろうとして健一に似たたかに殴られる。金村はビール瓶の底を割って、自分の左腕をそれで切って血を噴き出させてみせる。金村の鬼気迫る振る舞いに、健一は恐れをなして逃げてゆく……。

金村の父親が「日本人兵士」として戦争に赴き、片腕を失くす重傷を負ったにもかかわらず、障害者年金をもらえなかったこと、金村に敵愾心を燃やしている健一の母親もまたじつは朝鮮人であることが示唆されているなど、この作品にこめられているものはきわめて重い。

さらに同誌掲載の、鮎沢しほり「ブランド」は、あり得たかもしれない医療ミスを鋭く告発した短篇。作品は、一九八一年に執筆された「妻・関宿春子の手記」と二〇一八年に投函された「娘・佐倉（旧姓・関宿）真美の手紙」の二部で構成されている。

春子の夫・久勝は六十歳で胆のうの摘出手術を受けることになる。三時間のはずの手術がさらに数時間をへても終わらず、ようやく病室に戻ってきた久勝はほとんど意識不明の状態である。医師から、全身麻酔の段階でトランプが起こり、手術もストップした、と春子に説明がなされる。見舞いに訪れた娘の真美は、製薬会社に勤務して、トラブルの

原因を問いただす。麻酔科部長は「関宿さんは麻酔の管を入れにくい体型で挿管困難なんですね」と説明する。その後、久勝は痙攣を起こし、医師は脳障害による神経脱落の可能性を指摘する。真美は手術当日、神経科部長は不在で、研修医とその指導医が麻酔を施そうとしていてトラブルに至ったことを知る。

以上は「妻・関宿春子の手記」の要約だが、続く真美の手紙では、その後久勝が三十六年間、不自由な車椅子生活を続けながら、九十六歳で亡くなったことが告げられる。末尾には、麻酔事故から半年のころに実施された、久勝を被験者とした心理学テストに関する資料が提示されている。設問として提示されている最初の言葉に続けて、あとの言葉を被験者が補ってゆくテストである。そこには、直接は語ることが困難だった久勝の思いが凝縮されている。この構成も巧みである。

久勝の「挿管困難症」を一万回に一つの事例と告げる医師に、「先生にとっては一万回に一つの症例でも、父にとってはすべてなのです」と食い下がる真美の言葉が、全篇に響きわたっている。

これようやく『あべの文学』第30号の冒頭三篇を紹介したことになるが、この調子でゆけば、今回は『あべの文学』を取り上げるだけに終わってしまう。実際、江戸後期の商家を舞台にした「御禁制品」をめぐるの河

内隆雨「喜三次」は優れたエンターテイメントに仕上がっているし、日野あすか「あかね空」の、江戸初期、まだ豊臣方の落ち武者の厳しい探索が続く時代に、荒れ果てた大坂（大阪）の天王寺で綿の木栽培を定着させた一家の物語も捨てがたい。つまり、そういう歴史小説の書き手も『あべの文学』には何人か存在しているのだ。他の書き手には申し訳ないが、あと二篇だけ紹介しておきたい。

森田浩平「海辺の町にて」は、中学校一年になった竹井秀雄の、海辺の町での淡い初恋を描いた好短篇。

中学校に上がったばかりの秀雄は、入学祝いに母に買ってもらった自転車の練習を広場でして、失敗を繰り返している。すると、やはり自転車に乗った若い女性が「自転車の練習は、そんなやり方では駄目よ」と声を掛けてくる。彼女が後ろの荷台を手で押えておく形で、次第に秀雄の自転車はまっすぐに進むようになる。彼女は近くに住む高校三年の池野沙織と名乗る。

約一ヶ月後、同じ広場で秀雄は沙織と再会する。沙織は秀雄が自転車を上手に乗れるようになったのに感心する。秀雄は両親が離婚して母と二人暮らしであると語り、一方沙織は、秀雄と同じ年頃の弟がいたが交通事故で亡くなり、以来、家族の関係は冷え切っている、と打ち明ける。そして翌週、サイクリン

グに行こうと秀雄を誘う。沙織が作ったサン
ドイッチを昼食にした夢のようなサイクリン
グが実現する。さらに、夏休みには登山と、
秀雄にとっては思わぬ沙織との時間が過ぎて
ゆく。その間秀雄は、沙織とのことを日記に
克明に書き留めてゆく。

秋になって会えない日々が続いたあと、秀
雄は沙織がベンチに男性と腰かけているの
目にする。十二月の期末試験のあと、浜辺で
秀雄は沙織と久しぶりに出会う。自分にはつ
き合っている十歳年上の男性がいて、母親の
反対を振り切って「その人のところに行く」
と沙織は伝える。秀雄はその夜、沙織とのこ
とを記していた日記を海にむかつて投げ捨て
る…。

文章がきわめて明晰でかつ視覚的な印象が
鮮やか。美しい映画を見ているようである。
森口透「ヘーゼル色の瞳」はちよつとあり
得ない話を、説得力をもつて描いている。

「私・服部達夫は七十二歳。K市の文化セ
ンターのエッセイ講座の講師をはじめて務め
ることになる。作品の出だしでは教室での合
評会の模様が展開される。それぞれの背景を
もった生徒のさまざまな作品。とくにYと表
記されている生徒は「私」がまっ赤になるほ
ど朱を入れて提出作品を返したことに反発し
て、教室をやめてしまう。このあたりはひよ
つとすると作者の実体験そのものではないか、

これで小説と呼べるのかしらと首を傾げてい
ると、生徒のひとり、関根朋子を中心にせり
だしてくるところから、物語が動きはじめる。
「私」は三十代後半（のちに四十七歳と判明
する）とおぼしき関根の「ヘーゼル色の瞳」
に、次第に心を乱されてゆくのである。そし
て、同じような心の乱れを覚えた高校時代の
ことを思い起こす。

高校三年のとき「私」のクラスには「薄め
の褐色」（ヘーゼル色の瞳）の美しい佐々木彩
子がいた。近寄りがたい名家の娘だったが、
その彼女が思わぬことに、数学や物理の質問
を「私」に問いかけるようになる。やがて「私」
の成績はいつとき下降線をたどる。佐々木彩
子に心を乱されたせいである。

関根朋子のエッセイがK新聞の応募企画で
入選し、さらに年間最優秀賞に選ばれたとき、
その授賞式で「私」は彼女の母親が二年前に
七十歳で亡くなつていふことを知る。そして、
彼女がほかでもない、佐々木彩子の娘ではな
いかと考え始める…。

物語の最後で、関根朋子が佐々木彩子のじ
つ娘であること、「私」が母の高校時代の
思い出として聞かされていた母親の同級生で
あることに講座の途中で気づいていたことが
打ち明けられる。こういう物語を描き切るこ
とも、小説の醍醐味そのものだ。

以上、『あべの文学』第30号から主に五篇

を紹介することになったが、ほかにも紹介す
べき作品がいくつも残っている。これは、た
んに『あべの文学』の歴史を超えて、同人誌
の歴史そのもののなかに刻まれるべき一冊だ
と私は思う。

記念号ということでは、『北方文学』の「創
刊80号記念」が届いている。こちらも編集後
記までふくめ三四四ページの大幅。同人誌と
しては珍しく毎号評論に多くのページをあて
ている。今回は同人だったささとうのぶひとの
追悼特集にくわえて、長谷川龍生の追悼特集
が組まれている。

東日本大震災の直後に書かれ、『北方文学』
第65号に掲載されたという長谷川の詩「鹿、
百頭の」を冒頭に置いたその特集では、画家
の木下晋、詩人の館路子、批評家の柴野毅実
が追悼文を寄せている。それぞれがいかにも
長谷川龍生らしいエピソードを伝えてくれて
いて貴重。柴野毅実「妄想によって世界と対
峙する詩人」によれば、二〇一五年から一六
年にかけて、長谷川は柴野の出版社、玄文社
で新詩集を刊行する計画を持っていたという。
「小説同人誌評」の枠には収まらないこと
だが、大事な情報としてここに記しておく。
『法螺』も第80号が届いているが、残念な
がらこちらには表紙に「終刊号」と銘打たれ
ている。巻頭に掲載されている長らく編集長
を務めてきた西向聡の「さらば法螺よ——枚

方文学、花も嵐も半世紀——」によれば、発行母体である「枚方文学の会」の結成が一九七二年。翌年から年十回の枚方市民文学講座を開催したという。その際の講師が以下のとおり記されている。

講師の顔ぶれは、詩人の小野十三郎、井上俊夫、港野喜代子、福中都生子、小説家の西口克己、北川莊平、川崎彰彦、今江祥智、文芸評論家の八橋一郎、小島輝正、千頭剛ほかの諸氏であった。

西向自身の記しているとおり、校長だった小野はもとより、当時の大阪文学学校の講師陣の全面的協力によって支えられた市民講座だったのだ。その後一九七七年に『法螺』が創刊された。ひとつ大法螺を吹いてやろうというところから付けられた誌名という。以来、四十三年、八十号、確かによく続いたものだ。およそ手書き以外にあり得なかつた時代からワープロ、パソコンの時期をへて、いまやオンライン合評も可能な時代となったのだ。終刊号には、「掌短編小説」として五人の同人の作品が掲載されている。ここでは西向聡「遠雷」を紹介しておきたい。

小島三十四（みとし）は現在、六十三歳、八年前に長年勤めた音響機器メーカーをリストラされ、その後再就職した会社を定年退職

し、いまは年金受給制限の枠内で、駅前駐輪場の管理人をしながら細々と暮らしている。

小島は、久しぶりに、かつての同僚、的場、渡辺と大阪お初天神の鰻料理の店で会食する。的場も渡辺も同じ時期に解雇された身である。

一世代以上若い渡辺は新しい職場で営業マンとして活躍しているようだが、二歳年上の的場はリストラのあと妻と離婚して、瀬戸内の真鍋島の生家で暮らしている。しかも、顔色が病的に黒い。食卓に並ぶ鰻の凶暴なイメージは自ずとかつてのリストラへと話題を誘う。そこから、小島の回想によって、実際のリストラ前後の社内模様が開示される。

京都に暮らす渡辺を見送ったあと、小島と的場は喫茶店で語り合う。今回の会食に誘ったのは的場だったが、ほんとうに話したかったことはそこでもうやく語られる。お互いの現在の仕事のこと、的場の病気の徴候のこと、的場夫婦が離婚にいたった経緯……

タイトルの「遠雷」は、八年前のリストラがいまなお小島と的場の人生に大きな影響をおよぼしていることにちなんでいる。同時に、「法螺」終刊号という文脈で読めば、半世紀も前の賑やかなどよめきがいまなお響きつづけているような印象にもなる。

今回届いている『黄色い潜水艦』の表紙にも「71号記念号」と印刷されている。まだ元氣だったころの故・川崎彰彦がビートルズの

曲「イエロー・サブマリン」からつけた誌名だったと記憶しているが、七十号ではなく七十一号を記念号と称するところにも、一種のひらめきを感じさせる。考えてみれば、創刊号は第一号なのだから、七十号よりも七十一号のほうが「記念号」にふさわしいとも言えるのだ。

同誌巻頭に置かれている木下衣代「ほんぶんの光」は、姉妹の情愛の暗部に思わぬ光をあてた力作。

冒頭「私」はリノリウムの床に身を横たえている。生まれたときから細かい体で繊細な神経をしていた妹についての回想がはじまる。やがてそこが病院の地下一階の廊下である。ことが分かる。その病院に、四十代の妹が入院しているのだった。

甥（妹の息子）がある日不意に電話を掛けて来て、妹が入院したという。妹は、婦人科の手術を受けたあと、錯乱状態に陥るようになったようなのだ。「私」は甥を出産する前後にも妹が尋常でない不安に怯えていたことを思い出す。「私」は面会時間以外の朝や夜にも妹の見舞いに訪れる。ようやく回復の兆しが見えた妹は、姉が夜遅くに見舞いに来ることにかえって気遣いを示す。さらに、退院後に夫のブティックをもう一度手伝うことを考えている妹に「私」が無理をするなど再三注意したとき、妹はとうとう姉の一方的な思いや

りに堪忍袋の緒を切らす。そして、姉のほうこそ夫が何年も前に家を出て行ったままではないかと、「私」が秘め隠していた事実をぶつける…。

作中には「私」が自宅で夫に「おかえりなさい」と声をかける場面も描かれているが、「私」の一種の自己幻想なのだろう。「私」は夫がずっと不在であることをいわば自分にも秘め隠していたのだ。「71号記念号」にふさわしい、緊張感のある好短篇だ。

『仙台文学』は第95号が届いている。同誌掲載の、牛島富美二「棲む」では、小さな町のコミュニティ模様が軽快に展開されている。

優樹は四十歳過ぎの、いささか優柔不断に見える独身。行きつけの「味よし」でラーメンを食べていると、髪が伸びていた優樹は、新しい若い女店員アサミから彼女の同級生ユウコがやっている床屋「紙切り虫」を紹介される。優樹にはやはり行きつけの散発屋「サイレント」があったのだが、アサミの言葉に導かれるように、彼は「髪切り虫」を訪れる。そこから、優樹はアサミとユウコの三角関係のようなものに翻弄されることになる。四人の姉のもとに育った優樹は、女性と会うとすぐに苦手だった姉のいづれかのことを思い浮かべて、固まってしまうのだ。

これが物語の中心の筋なのだが、そこに挟みこまれている町のソフトボールチームの話

もおもしろい。数年前にその町に引越してきた優樹は、年長者の多いそのチーム期待の「若手」、ピッチャーで四番なのである。優樹は、チームの主力のひとりが抜けた穴を、床屋「サイレント」のマスターで埋めることを考える。マスターは聾啞者だが、野球でキャッチャーを務めていた過去があるのだ。

この作品でアサミ、ユウコの物語とソフトボールチームの話は巧みに絡み合っているのだが、ソフトボールチームの話は、もつとたつぷり膨らまして、独立した作品としても読んでみたいという感想を私は抱いた。

『革』第32号掲載の、月嶋楡「小さな世界」は、同性愛の問題を世界の広さという視点で描いている。

「私」（美加）は大学時代の同級生・明子と月に一度は飲みにいったり、映画にいったりする仲。「私」は大学卒業間際に「原因不明の精神の病」に見舞われ、四年あまり苦しい闘病生活を送り、それから二年後、ようやく回復したときに明子と再会したのだった。大学時代は自分が優位にあると考えていた明子との関係はすつかり逆転したように思えた。一方で、明子は自分には秘密があつて、美加にさえそれを打ち明けられないと語る。そういうたがいの「小さな世界」が開かれてゆくのは、明子が同性愛者であることを知った「私」が、電話で励ます言葉を掛けたときだった。

思わぬことに、「私」は明子から理解者のふりをするな、と厳しい言葉を浴びせられるのだ。その後、明子は自分の状況を赤裸々に描いた小説を著名な雑誌に応募してみごとに入選する。それを読んだ「私」は胸を打たれて、以前に明子に連れてゆかれたワインバーを訪れ、明子ともう一度出会う。ゲイやレズビア人が集まっているその小さなワインバーこそが、もつと広い世界への入口なのだ。

『AMAZON』第499号掲載の、北川珪子「世界で一番」は、一九六〇年代初頭の、小学校五年生の女子生徒・礼子と男子生徒・寺沢健一の間を丁寧な筆で描いていて印象深い。転校生でいかにもぱつとしない寺沢が、習字のときに画仙紙を礼子にもらったお礼に「世界で一番美しいもの」を見せてやると言う。寺沢の一家は川辺に浮かぶ船に暮らしているのだが、その近くから見える夕陽が「世界で一番美しいもの」なのである。作中ではあいく曇つていて冴えない設定である。それがかえって礼子の胸に（読者の胸に）「世界で一番美しいもの」を浮かぶ上がらせている。

『V.I.K.I.N.G』第83号掲載の、宇江敏勝「寒川（そうがわ）の秋祭り」は、小説というよりドキュメンタリーの感覚で綴られている。それだけに、作者の普段の小説の背景にある、粘り強い取材の様子の一端がうかがわれて、興味深い。